四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書 58

送電鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

江田川遺跡３・川向山添遺跡２・横谷遺跡２

2022年（令和４年）３月

四日市市教育委員会

四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書 58

江田川遺跡３・川向山添遺跡２・横谷遺跡２

二〇二二年（令和四年）三月

四日市市教育委員会

巻頭図版１

江田川遺跡調査区全景（南から）

江田川遺跡　火葬穴ＳＦ73（北から）

江田川遺跡　土師器焼成坑ＳＦ76（南から）

巻頭図版２

川向山添遺跡調査区全景（南東から）

横谷遺跡調査区全景（南西から）

例言

1　本書は、送電鉄塔建設にかかる江田川遺跡第３次調査・川向山添遺跡第３次調査・横谷遺跡第２次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査にかかる費用は、中部電力パワーグリッド株式会社の負担による。

3　現地調査および整理作業は、下記の体制で行った。

・調査主体　四日市市教育委員会

教育長	葛西　文雄（～令和３年７月）、廣瀬　琢也（令和３年８月～）
副教育長	栗田　さち子（平成29年度）、松岡　俊樹（平成30年度～）
教育監	上浦　健治（平成29年度）、廣瀬　琢也（平成30・31年度）
	高橋　啓一（令和２年度）、内村　信彦（令和３年度）
理事	中村　竹雅（平成29・30年度）

・調査担当　四日市市教育委員会 社会教育課（平成31年度以降は社会教育・文化財課）

社会教育課長	川尻　秀納（～平成31年度）、伊藤　早百合（令和２年度～）
副参事兼課長補佐	葛山　拓也
主幹（令和３年度課付主幹）	清水　政宏
嘱託（令和２年度以降は会計年度任用職員）	山本　達也、川崎　志乃
	荒木　昌俊（平成30年度）、片岡　博（平成31年度～）
室内整理員	北野節子、鈴木美和子

4　樹種調査及び金属製品の保存処理は株式会社吉田生物研究所に委託した。

5　報告書の作成業務は令和２・３年度に四日市市教育委員会社会教育・文化財課が行い、執筆・編集は山本達也・川崎志乃が行っている。

6　遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、方位の表示は座標北を用いた。

7　本書に使用した遺構表示記号は、下記のとおりである。
　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑　　ＳＦ：火葬穴・土器焼成坑　　ＳＤ：溝

8　本書で表記する色調は、農林水産省水産技術会事務局及び財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』（2002年版）に準拠した。

9　本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、四日市市教育委員会が保管している。

本文目次

Ⅰ　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・1
　1．調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・1
　2．文化財保護法等にかかる諸手続き・・・・・1
Ⅱ　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　1．地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　2．歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・4
Ⅲ　調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　1．調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　2．江田川遺跡(第３次)の遺構と遺物・・・・・9
　3．川向山添遺跡(第３次)の遺構と遺物・・・・17
　4．横谷遺跡(第２次)の遺構と遺物・・・・・・17
Ⅳ　結語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
　四日市市江田川遺跡出土炭化材の樹種調査結果・25

挿図目次

第１図　送電鉄塔位置図・・・・・・・・・・・・・2
第２図　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・6
第３図　江田川遺跡調査区平面図・・・・・・・・10
第４図　江田川遺跡調査区西壁・SD72・SD77土層断面図、D2P1出土状況図　・・・・・・・・・・11
第５図　江田川遺跡SF73出土状況図・土層断面図・12
第６図　江田川遺跡SF76出土状況図・・・・・・・14
第７図　江田川遺跡SF76平面図・断面図・・・・・15
第８図　江田川遺跡SB78平面図・断面図・・・・・16
第９図　川向山添遺跡調査区平面図・断面図・・・18
第10図　横谷遺跡調査区平面図・・・・・・・・・19
第11図　横谷遺跡土層断面図①・・・・・・・・・20
第12図　横谷遺跡土層断面図②・・・・・・・・・21
第13図　横谷遺跡SK41・SK42・Pit平面・断面図・23
第14図　遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・24

挿表目次

第１表　送電鉄塔建設事業に伴う埋蔵文化財保護対応一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２表　遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・23

写真図版

巻頭図版　江田川遺跡調査区全景
　江田川遺跡火葬穴SF73・江田川遺跡土師器焼成坑SF76
　川向山添遺跡調査区全景
　横谷遺跡調査区全景
図版１　江田川遺跡SF73完掘状況・遺物出土状況
図版２　江田川遺跡SF76・遺物出土状況
図版３　江田川遺跡SB78・SD72
図版４　川向山添遺跡調査区全景・SD71・SB64
図版５　横谷遺跡調査区全景・SK41
図版６　出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯

１．調査に至る経緯

送電鉄塔建設事業の計画は、平成28年９月15日・平成29年３月16日・平成30年８月３日に埋蔵文化財の照会があり、一部の鉄塔が遺跡の範囲内にあったため、四日市市教育委員会と中部電力株式会社(平成31年度：中部電力ネットワークカンパニー、令和2年度～：中部電力パワーグリッド株式会社)との間で埋蔵文化財の保護措置が協議されることとなった。
協議の結果、事業が広範な範囲にわたるため、複数の遺跡で保護措置の対応が必要であることから、各鉄塔の建設計画に合わせて、個別に対応することになった。(第１表参照)

なかでも、江田川遺跡・川向山添遺跡・横谷遺跡内での事業計画は、一般国道１号北勢バイパス(以下、北勢バイパス)建設に伴う発掘調査を実施している隣接地であったことから、遺構・遺物が検出されることが想定されるため、設計変更協議を重ね、仮設道設置や表土処理等において対応していただいた。

以下、発掘調査に至った江田川遺跡・横谷遺跡・川向山添遺跡について、経緯を記載する。

【江田川遺跡】

江田川遺跡は、四日市市西坂部町山添に所在する。遺跡内では過去に北勢バイパス建設に伴う発掘調査を実施しており、今回行った第３次調査は中部電力株式会社　電力ネットワークカンパニー(現、中部電力パワーグリッド株式会社)の送電鉄塔建設(新設NO.22)に伴う事前調査として実施した。
協議の結果、平成31年３月25日に試掘調査を行い、遺構・遺物を確認した。その結果を受け、再度協議の結果、発掘調査を行うこととなり、令和元年５月９日より６月７日まで調査を実施した。

【川向山添遺跡】

川向山添遺跡は、四日市市西坂部町字山添、御館に所在する。遺跡内では過去に北勢バイパス建設に伴う発掘調査を実施しており、今回行った第３次調査は中部電力パワーグリッド株式会社の送電鉄塔建設に伴う事前調査として実施した。
協議の結果、事業地は平成30年度に実施した北勢バイパス建設に伴う発掘調査(第２次調査)時に、送電中の既設鉄塔(既設N0.21)であったため、鉄塔敷地外においても発掘調査対象から控えざるをえなかった経緯があり、隣接地において多数の遺構が確認されているため発掘調査を行うこととなり、令和２年５月25日より６月３日まで調査を実施した。

【横谷遺跡】

横谷遺跡は、四日市市西坂部町字落河原に所在する。遺跡内では過去に北勢バイパス建設に伴う発掘調査を実施しており、今回行った第２次調査は中部電力株式会社　電力ネットワークカンパニー(現、中部電力パワーグリッド株式会社)の送電鉄塔建設(新設N0.23)に伴う事前調査として実施した。
協議の結果、平成31年３月26日に試掘調査を行い、遺構・遺物を確認した。その結果を受け、再度協議の結果、発掘調査を行うこととなり、令和元年７月16日より８月６日まで調査を実施した。

２．文化財保護法等にかかる諸手続き

文化財保護法に係る諸手続きは、以下により行っている。

江田川遺跡(新設N0.22)
【法93条】平成30年10月17日付、社会第264号
【法93条2】平成30年10月29日付、(県教育長通知)社会第263号－３(事業者宛)
【試掘調査】
・協定書・協議書締結　平成30年12月10日(中部電力ネットワークカンパニー　四日市電力センター　所長　北畠慎也・四日市市教育長　葛西文雄)
・調査実施　平成31年３月25日
・結果報告　平成31年４月８日付、社文第８号(事業者・県教育長宛)
【法99条】
令和元年５月９日付け、社文第71号(県教育長宛)
【発掘調査】
・協議書締結　平成31年４月18日(中部電力ネットワークカンパニー　四日市電力センター　所長　北畠慎也・四日市市教育長　葛西文雄)
・変更協議書締結　令和元年６月21日(中部電力ネットワークカンパニー　四日市電力センター　所長　北畠

第１図　送電鉄塔位置図

番号	遺跡名	鉄塔路線名	鉄塔(個別番号)		法93条による発掘届出書の提出	対応	面積	工事概要
			新設	既設				
1	川原宮遺跡	西名古屋北勢線		No. 20	平成30年10月17日付　社会第262号 令和２年８月７日付　社文第144号	慎重工事	653.04㎡	工事囲い基礎単管切土
2	川向山添遺跡			No. 21	平成30年10月17日付　社会第263号	発掘調査	169.7㎡	撤去
3	江田川遺跡		No. 22		平成30年10月17日付　社会第264号	試掘調査 発掘調査	206㎡	新設
4				No. 22	平成30年10月17日付　社会第265号	工事立会	2,402.94㎡	撤去
5	横谷遺跡		No. 22-1		平成30年10月17日付　社会第268号	工事立会	3,148.49㎡	新設
6				No. 22-1	対象外	慎重工事		地上での切断
7			No. 23		平成30年10月17日付　社会第266号	試掘調査 発掘調査	289㎡	新設
8				No. 23	平成30年10月17日付　社会第267号	工事立会	3,848.43㎡	撤去
9				No. 27	平成30年10月17日付　社会第270号	慎重工事	796.21㎡	工事囲い基礎単管切土なし
10	落河原遺跡	東員堀木線		No. 24	平成30年10月17日付　社会第269号	慎重工事	102.42㎡	工事囲い基礎単管切土なし

第１表　送電鉄塔建設事業に伴う埋蔵文化財保護対応一覧表

慎也・四日市市教育長　葛西文雄)

・結果報告　令和元年６月17日付、社文第71号－３(事業者・県教育長宛)

・発見届　令和２年６月26日付、社文第71号－５(四日市北警察署長宛)

・埋蔵文化財認定　令和元年７月８日付、教委第12－4510号(県教育長通知)

・譲与申請　令和２年４月６日付、社文第10号(県教育長宛)

川向山添遺跡(既設NO. 21)

【法93条】平成30年10月17日付、社会第263号

【法93条2】平成30年10月29日付、(県教育長通知)社会第263号－２(事業者宛)

【協定書・協議書の締結】

・協定書締結　平成30年12月10日(中部電力ネットワークカンパニー　四日市電力センター　所長　北畠慎也・四日市市教育長　葛西文雄)

・協議書締結　令和元年６月21日(中部電力ネットワークカンパニー　四日市電力センター　所長　北畠慎也・四日市市教育長　葛西文雄)

【法99条】

令和２年５月25日付け、社文第75号(県教育長宛)

・調査実施　令和２年５月25日～令和２年６月３日

・結果報告　令和２年６月18日付、社文第75号－３(事業者・県教育長宛)

・発見届　令和２年６月19日付、社文第75号－４(四日市北警察署長宛)

・埋蔵文化財認定　令和２年６月30日付、教委第12－3424号(県教育長通知)

横谷遺跡(新設NO. 23)

【法93条】平成30年10月17日付、社会第266号

【法93条2】平成30年10月29日付、(県教育長通知)社会第263号－２(事業者宛)

【試掘調査】

・協定書・協議書締結　平成30年12月10日(中部電力ネットワークカンパニー　四日市電力センター　所長　北畠慎也・四日市市教育長　葛西文雄)

・調査実施　平成31年３月26日

・結果報告　平成31年４月８日付、社文第９号(事業者・県教育長宛)

【法99条】

令和元年７月16日付け、社文第138号(県教育長宛)

【発掘調査】

・協議書締結　平成31年４月18日(中部電力ネットワークカンパニー　四日市電力センター　所長　北畠慎也・四日市市教育長　葛西文雄)

・結果報告　令和元年８月28日付、社文第138号－３(事業者・県教育長宛)

・発見届　令和２年４月８日付、社文第16号(四日市北警察署長宛)

・埋蔵文化財認定　令和２年４月16日付、教委第12－4501号(県教育長通知)

(川崎)

Ⅱ　位置と環境

川向山添遺跡（１）・江田川遺跡（２）・横谷遺跡（３）周辺の地理的・歴史的な環境を通観してみたい。文章中の番号は第２図の番号に対応している。

１．地理的環境

川向山添遺跡（１）と江田川遺跡（２）は、四日市市西部の西坂部町に所在し、海蔵川と江田川に挟まれた御館台地の東端にある遺跡である。台地の中央を東西に横切る県道田光・四日市線の北側が川向山添遺跡、南側が江田川遺跡となっているが、既往の調査から古墳時代後期を中心とする一連の遺跡であると考えられている。横谷遺跡（３）も、同じく西部の西坂部町に所在し、江田川右岸の丘陵北端に立地する縄文時代及び古墳時代の遺跡である。

海蔵川や江田川をはじめ、市域を流れる河川は鈴鹿山脈に源を発し、東流して伊勢湾に注ぐ。

市内では、東部の海岸平野を東海道が南北に通っている。途中の日永追分で参宮道は分岐し、伊勢神宮へ向かう。伊勢湾に面する湊からは、対岸の三河や美濃に通じ、外海へ出て東国とも交易が行われた。鈴鹿山脈の八風越えや千種越えによって、近江を通る東山道と繋がり、京と東国を結ぶ交通の要衝となっている。

２．歴史的環境

旧石器時代

四日市市周辺では、ナイフ型石器の出土する遺跡がいくつか知られている。内部川・鎌谷川流域に属する内戸谷Ｂ遺跡や宮蔵遺跡などの市域南部のグループと、朝明川流域の久留倍遺跡（４）及び、削器・剥片のみの発見であるが当時代に属する可能性がある野呂田遺跡（５）などを含む市域北部のグループである。川原宮遺跡近隣では旧石器の出土は確認されていない。

縄文時代

縄文時代草創期に属するものとしては東北山Ａ遺跡（６）など、有舌尖頭器が出土した遺跡が鈴鹿山麓扇状地の台地上で多数確認されている。早期の遺跡は、中野山遺跡（７）で縄文早期の煙道付炉穴が多数検出されたほか、内部川流域の一色山遺跡で押型文土器が出土している。このほかに発掘調査で遺構が確認されている例を挙げると、東日野遺跡（８）や小牧南遺跡（９）で竪穴住居が、西ヶ広遺跡(10)で縄文中期後葉の土坑とその中から深鉢が、土丹遺跡(12)や桑名市の志知南浦遺跡(11)やといった沖積地で縄文晩期の突帯文土器が、伊坂遺跡(13)で狩猟用の陥し穴が検出されており、徐々に様相が明らかになりつつある。

弥生時代

弥生時代になると、まず前期には海蔵川と三滝川に挟まれた生桑丘陵上に、いずれも多重環濠をもつ大谷遺跡(14)、永井遺跡(15)などの集落が営まれる。中期ないし後期に入ると大谷遺跡、永井遺跡も継続して営まれるが、そのほかの地域でも遺跡数が飛躍的に増加し、海岸部から内陸部に広く分布が見られるようになる。

久留倍遺跡（４）では中期から後期にかけての竪穴住居のほか、方形周溝墓が確認され、流路からは多くの土器・木製品が出土した。特に後期になると遺構数が飛躍的に増加する。これと時期を同じくして、久留倍遺跡南西の丘陵上に立地する山奥遺跡(16)で県下有数の大規模な集落が営まれる。土製模造鏡や多数の鉄製品などの遺物があり、注目される。このほか中野山遺跡でも集落が確認されている。菟上遺跡(17)では中期後葉に大規模な集落が形成される。後期になると菟上遺跡と一つ西側に谷を隔てた西ヶ広遺跡(10)が中心的集落となる。一方で東側の丘陵頂部に営まれた金塚遺跡(18)では環濠を持つ高地性集落が営まれ、山村遺跡(19)でも環濠が確認されている。低地部では、辻子遺跡(20)で中期後葉から後期の集落及び水田が確認されている。墓域としては、久留倍遺跡及びこれに隣接する大矢知山畑遺跡(21)で方形周溝墓が検出されたほか、山村遺跡でも方形周溝墓が20基検出されている。他に菟上遺跡や広永城跡(22)、間ノ田遺跡(23)でも方形周溝墓が確認されている。この他、金塚遺跡では綾杉文を有する銅鐸破片が、伊坂遺跡では江戸時代に扁平鈕式袈裟襷文銅鐸が出土している。

南方の海蔵川北岸の上野遺跡(24)でも中期後葉の集落跡と方形周溝墓が確認されている。

川向山添遺跡（１）近傍では横谷遺跡（３）が弥生時代の遺跡として登録されているが、平成29年度の発掘調査では当該期の遺物は出土していない。

古墳時代

古墳時代前期に入ると、久留倍遺跡（４）や上野遺跡(24)でまとまった集落が見られるようになる。また、海岸に近い茂福城跡(25)の下層で確認された里之内遺跡(26)ではＳ字状口縁台付甕が出土しており、この時期に海岸低地への進出が始まったものと見られる。周辺の前期古墳は、内行花文鏡や車輪石・勾玉などが出土した志氐神社古墳(27)があるほか、員弁川水系では三角縁神獣鏡が出土した可能性がある桑名市の高塚山古墳が見られる程度である。しかし、菟上遺跡(17)では滑石製合子型石製品の蓋が出土し、伊坂遺跡(13)では勾玉や管玉が出土していることから、他にも消滅した古墳が存在した可能性もある。中期古墳としては、方墳を主体とする広古墳群(28)や、その東側にあって同じく方墳の可能性が指摘されている浄ヶ坊古墳群(29)がある。後期に入ると、遺跡数が爆発的に増加する。中野山遺跡では前期から続いて集落が営まれる。垂坂丘陵東部地域では、一旦断絶していた山奥遺跡で再び集落が営まれるようになる。海蔵川流域では、江田川遺跡（２）のほか、川向山添遺跡（１）、御館野遺跡(30)でも後期の集落が確認されている。

古墳は、特に７世紀以降に小規模な群集墳が多く築造される。筆ヶ崎古墳群(31)や八幡古墳(32)、御池古墳群(33)のように横穴式石室を主体とする古墳がある一方、死人谷横穴墓群(34)や金塚横穴墓群(35)、朝日町の広永横穴墓群(36)のように横穴墓も多数見られ、その導入の背景が注目される。また、北山Ｃ遺跡(37)では多数の方墳からなる大規模な群集墳が確認されている。このほか、所属時期は明確ではないが、鈴木敏雄氏の記録によれば御池古墳群東側の丘陵上に「大塚」と称される前方後円墳が１基存在したとされる。

生産遺跡としては垂坂丘陵や朝日丘陵周辺に、まず５世紀後半に小杉大谷古窯跡(38)が築かれ、その後、伊坂窯跡（39）、北ノ山古窯跡（40）、西ヶ谷古窯跡(41)、名戸谷口古窯跡(42)、垂坂古窯跡(43)、鳩浦古窯跡(44)など古墳時代中期から奈良時代にかけて須恵器窯が築かれた。西ヶ谷古窯跡に隣接する西ヶ谷遺跡(45)は、出土遺物からその生産活動に関わっていた集落と考えられる。土師器焼成坑については、山奥遺跡や西ヶ谷遺跡、落河原遺跡(46)、久留倍遺跡で確認されている。

飛鳥～奈良時代

横谷遺跡の所在する坂部町は、『倭名類聚鈔（和名抄）』に見える、古代三重郡の刑部郷に相当すると考えられている。刑部郷内に属すると考えられる当該期の主要遺跡は、貝野遺跡(47)、江田川遺跡、落河原遺跡、上ヶ谷遺跡(48)などがある。特に貝野遺跡では、やや整然さを欠くが、古代の掘立柱建物が多数検出されているほか、暗文土師器がまとまって出土しており、遺跡の規模から考えても郷内の中心的な集落であったと考えられる。落河原遺跡では石帯が出土しており、官人の存在をうかがわせる。

また、近隣の朝明川流域を中心とする古代朝明郡に関わると思われる発掘調査成果が近年相次いでおり、今後の研究に大きな期待が持たれる。久留倍遺跡では東向きの正殿や八脚門等政庁の施設、大規模な東西棟の掘立柱建物等が検出された。また溝で方形に区画された内側に整然と並ぶ総柱建物が確認され、朝明郡の正倉院跡と推測されている。一方、西ヶ広遺跡で確認された、奈良時代に計画的に配置された大型の掘立柱建物群は、官衙に関連する可能性が高い建物群である。谷を隔てた丘陵上に広がる菟上遺跡では、西ヶ広遺跡より古い掘立柱建物群が見つかっている。このほか、宮の西遺跡(49)では石帯や木簡が、落河原遺跡や前山遺跡(50)で石帯が出土している。対して、山村遺跡、中村遺跡(51)、貝野遺跡などはこの時期の一般的な集落と思われる遺跡である。久留倍遺跡東方の下之宮遺跡(52)、下之宮南遺跡(53)は、低地部の集落遺跡と考えられる。中野山遺跡や筆ヶ崎古墳群の周辺では、多くの建物跡が見つかり、筆ヶ崎古墳群では鉄器加工に関係する遺構や遺物が検出されていることから、当地の古代郷名である大鐘郷との関係が考えられる。

古代三重郡で確認されている古代の寺院としては、智積町の智積廃寺(54)がある。昭和41年の発掘調査で金堂、講堂、僧坊が確認されている。瓦は、川原寺式のものが含まれ、寺方町の北浦古窯跡群(55)から供給を受けたと考えられている。岡山古窯跡群(56)は、古墳時代後期から営まれている窯であるが、奈良時代には硯など官衙や寺院との関りが考えられる器種を焼成している。さらに広域に目を向けると、塔心礎から唐三彩の蓋をもつ舎利容器が出また桑名市の額田廃寺(57)では飛鳥川原寺と同笵土した朝日町の縄生廃寺(57)では飛鳥川原寺と同笵の軒丸瓦が出土している。西ヶ谷遺跡や伊坂遺跡ではまとまった量の瓦が出土し、前者は小規模な堂の存在が、後者は瓦窯の存在が

第２図　遺跡位置図(1:50,000)［国土地理院　1:25,000　桑名・菰野・四日市東部・四日市西部　より］

想定される。そのほか、上ヶ谷遺跡では布目瓦が集中して散布する一角があり、その性格が注目される。

平安時代

平安前期には久留倍遺跡で引き続き正倉が建てられている。近接する大矢知山畑遺跡は豊富な緑釉陶器などの出土遺物から有力者の居館か寺院関連の遺跡とみられる。当時、当地域に大きな影響を及ぼしたと思われるのは、10世紀前葉に建立され現在も信仰を集める垂坂山観音寺(58)である。大膳寺跡(59)もその末寺の一つと伝わり、発掘調査で土馬や大量の瓦が出土しているが、遺物の時期は観音寺建立より古い。この近隣にある大谷瓦窯跡(60)は、大膳寺跡へ瓦を供給した瓦窯である。上野遺跡では人名の墨書灰釉陶器が出土している。

中世

律令的支配体制の崩壊に伴い、北勢地方の員弁郡・三重郡・朝明郡の三郡は相次いで伊勢神宮に寄進されて神郡となり、神宮の荘園である御薗・御厨・納所がたてられた。これらの荘園と関わりがあると考えられる遺跡としては、宮ノ西遺跡がある。これは古代から続く遺跡で、出土した木簡から古代柴田郷の一部であることが知られるが、墨書土器をはじめとする中世の遺物も豊富に出土しており、近隣の芝田遺跡(61)・小判田遺跡(62)などとともに当地周辺に比定される飯倉御厨の一角と考えられる。辻子遺跡は、多数の墨書土器や灰釉陶器などの出土遺物から、古代末期に朝明郡が神宮に寄進された後にこの周辺に所在した弘永御厨の中心域と推定されている。久留倍遺跡では中世の遺構・遺物も多く、掘立柱建物、井戸、溝、区画溝を伴う塚墓、火葬墓等を確認した。菟上遺跡では中世前期の集落と中世後期の大火葬墓群が見つかった。上野遺跡は区画溝と掘立柱建物が確認され、貴重な中世の集落資料となっている。川原宮遺跡(63)では、低地部における小集落とともに地震痕跡も確認されている。

城館について見ると、本遺跡周辺には1204年の三日平氏の乱に関係すると見られる高角城跡(64)、曽井城跡(65)があるが、いずれも明確な遺構は見られない。ほかに、百合谷城跡(66)、平尾城跡(67)、坂部城跡(68)、羽津城跡(69)がある。このうち、平尾城跡は1993年に発掘調査が行われている。さらに平野部に目を向けると茂福城跡(25)、浜田城跡(70)、赤堀城跡(71)がある。これらは地割や現存遺構から縄張りの復元が試みられており、赤堀城跡は現在までに５次にわたる発掘調査が行われ、土塁などの遺構が検出されている。朝明川流域では、大矢知城跡(72)、萱生城跡(73)、北山城跡(74)、市場城跡(75)などがあり、中でも伊坂城跡(76)は、近年の発掘調査で防御性の高い縄張りや礎石を有する巨大な櫓門が検出され、16世紀代の当地域における城づくりの最高到達点と評価されている。

【主要参考文献】
●四日市市
『四日市市史　第一巻　史料編　自然』1990、『考古Ⅰ』1988、『考古Ⅱ』1993、『古代・中世』1991
●四日市市教育委員会
『大谷遺跡発掘調査報告－Ａ地区、Ｂ地区－』1966、
『大谷遺跡発掘調査報告Ⅱ－Ｃ地区の遺構－』1976、
『大谷遺跡発掘調査報告Ⅲ－Ｃ地区の遺物－』1977
『西ヶ広遺跡発掘調査報告－Ｄ地区－』1972
『永井遺跡発掘調査報告』1973
『四日市の後期古墳』1973
『大膳寺跡』1978・1979・1980・1981・1982
『西ヶ谷遺跡３』2002、『西ヶ谷遺跡４』2002、『西ヶ谷遺跡５』2005
『大矢知山畑遺跡』2002
『山奥遺跡Ⅰ』2003、『山奥遺跡Ⅱ』2004
『久留倍遺跡５』2013、『久留倍遺跡６』2013
『川原宮遺跡』2015
『江田川遺跡』2016
『横谷遺跡』2021
●四日市市遺跡調査会
『上野遺跡』1991、『上野遺跡２』1992
『西ヶ谷遺跡』1996
●朝日町教育委員会
『縄生廃寺跡発掘調査報告』1988
●朝日町
『みえあさひ文化財マップ』1999
●三重県文化財連盟
『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970
●三重県埋蔵文化財センター
『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』2002
『伊坂城跡発掘調査報告』2003、『伊坂遺跡発掘調査報告』2004
『山村遺跡（第２次）発掘調査報告』2004
『辻子遺跡発掘調査報告』2004
『間ノ田遺跡・辻子遺跡（第４次）発掘調査報告』2005
『菟上遺跡発掘調査報告』2005
『広永横穴墓群・広永１号墳・広永城跡・広永遺跡発掘調査報告』2006
『西ヶ広遺跡（第３・４次）発掘調査報告』2006
『志知南浦遺跡発掘調査報告』2008
『中野山遺跡（第２・３・６・７次）発掘調査報告』2016
『中野山遺跡（第４・５・８～13次）発掘調査報告』2022
『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第４・５・７次）発掘調査報告』2019
『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第２・３・６次）発掘調査報告』2021
『北山Ｃ遺跡（第２～７次）・西山古墳群　発掘調査報告』2020
『居林遺跡・北山城跡（第２～４次）発掘調査報告』2022

Ⅲ　調査の成果

１．調査の方法

（１）調査区の設定

調査区の設定にあたり、鉄塔を新設する江田川遺跡・横谷遺跡については計画図に基づき、４箇所の鉄塔脚部を通るよう、２本ずつ幅１ｍ、長さ14ｍ前後の試掘坑を設定し、埋蔵文化財の有無を調査した。その結果、遺構・遺物が確認されたことから、鉄塔脚部を設置する４箇所の掘削部を包括するようにほぼ正方形に調査区を設定した。ただし、江田川遺跡の調査区は隣地境界に近接している関係で東側の掘削箇所をやや減じた。

既設鉄塔の撤去工事を行う川向山添遺跡は、平成30年度までに行われた北勢バイパス建設に係る発掘調査時に、送電のため鉄塔及びその周囲の部分の調査を控えざるをえなかった経緯があり、ここが正方形の島状に未調査地として残されていた状況であった。この調査で一部の遺構が鉄塔敷地内に及んでいることが明らかとなったため、試掘は行わず残存部分を全て調査対象区域とした。

（２）小地区の設定

調査区の設定後、調査区全体にわたって調査区の形に合わせた任意の４ｍ四方の小地区を設定した。各小地区には、北から南へ向かってＡから順にアルファベットを、西から東へ向かって１から順に数字を付与し、このアルファベットと数字の組み合わせにより各小地区を示した。遺構検出段階における遺物の出土位置の記録は、小地区ごとに行った。

（３）掘削

現地調査での掘削作業については、まず表土を重機で除去した。その後、人力により包含層掘削と遺構検出作業を行い、検出した各遺構をさらに人力で掘削した。土砂の搬出はベルトコンベアー等を使用せず全て人力により行った。

（４）遺構番号の付与

遺構番号は、それぞれの遺跡の前回調査からの連番とし、表記時に番号の前にＳＢ、ＳＤなど遺構の種類ごとの略称を付した。ピットは、小地区ごとに地区名を冠した通し番号を付した。

（５）写真撮影

遺構写真撮影は、主として４×５判及びブローニー版のポジフィルム・モノクロフィルムで行い、補助的に35㎜版ポジフィルム・モノクロフィルム及びデジタル一眼レフカメラを使用した。

（６）遺構実測

遺構実測は、掘削と写真撮影が完了したのち、国土座標に合わせた３ｍ四方のグリッドを設定のうえで基準ピンを打ち、手計測により実測を行った。

２．江田川遺跡（第３次）の遺構と遺物

（１）基本層位

基本層位は、黒褐色の表土下に黒褐色の包含層があり、地山はやや粘性のある褐色土である。表土と包含層の色調は近似しており、表土直下が地山となっている部分もあった。地表面から検出面までの深度は、概ね0.5ｍ前後である。

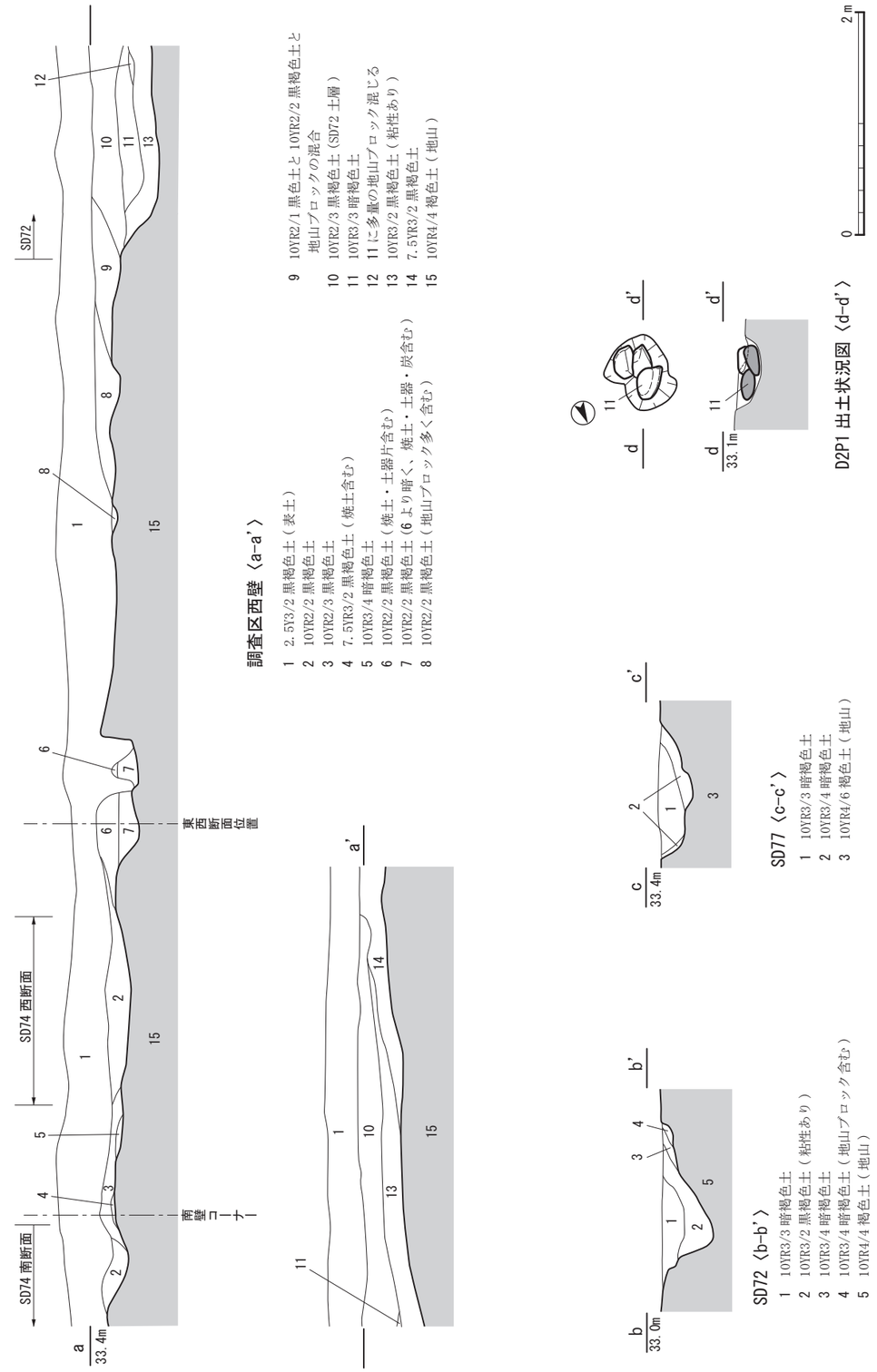
（２）遺構

検出した遺構は、火葬穴・土師器焼成坑・掘立柱建物・溝・ピットである。第１次調査区で多数検出した竪穴住居は見られなかった。

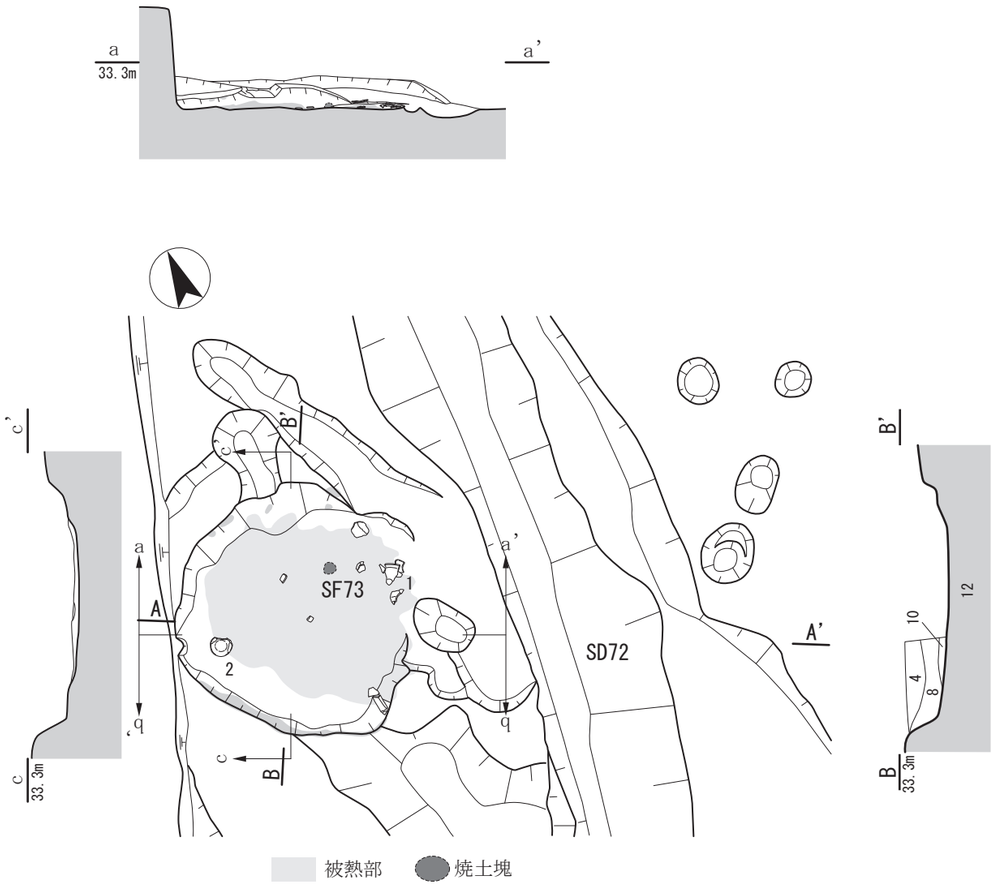
a. 火葬穴

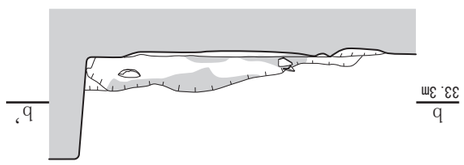
ＳＦ73（第５図）　調査区西側に位置する円形土坑である。東西1.7ｍ、南北1.7ｍで、検出面からの深さは0.3ｍである。検出段階で焼土が見られたため、当初は後述する土師器焼成坑のＳＦ76と同様の遺構と考えて掘削を行い、中央付近の床面で検出した焼土塊は覆土の一部と考えていた。しかし焼成に失敗したり層状に剥離したりした土師器片は出土せず、木炭の残片も見られなかった。床面は掘削が困難なほど硬く焼け締り、側壁も広く被熱部が認められたことからＳＦ76と比較しても高温の火が扱われたことが分かる。西側では床面からやや浮いた位置でほぼ完形の土師器杯が１点出土した。以上のような状況から火葬に用いられた土坑の可能性が考えられる。出土遺物は、土師器鍋・杯のほか、混入遺物として須恵器高杯がある。特に土師器杯は強い二次的な被熱が見られることから、火葬時に遺体と共に火にかけられたものであろう。床面付近は特に注意深く掘削したものの、火葬骨等は確認されなかった。時期は平安時代と考えられる。

第３図　江田川遺跡調査区平面図(1:100)

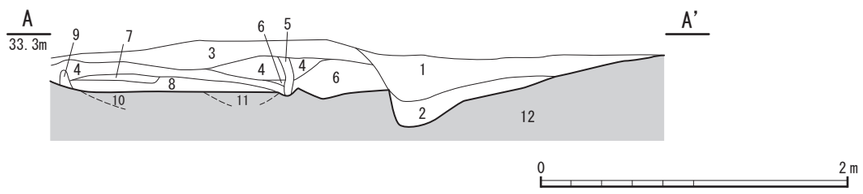


第４図　江田川遺跡調査区西壁・ＳＤ72・ＳＤ77土層断面図、Ｄ２Ｐ１出土状況図(1:50)





1　10YR3/3 暗褐色土
2　10YR3/2 黒褐色土（粘性あり）
3　10YR2/2 黒褐色土（焼土・土器片含む）
4　10YR2/2 黒褐色土（3より暗く焼土・土器・炭含む）
5　10YR3/4 暗褐色土（根痕、しまり弱い）
6　10YR2/2 黒褐色土（地山ブロック少量含む）
7　10YR4/6 褐色土（地山ブロック）
8　10YR2/1 黒色土（土器・炭・粘土含む）
9　10YR4/6 褐色土（7よりしまり弱い）
10　5YR4/8 赤褐色土（被熱地山）
11　7.5YR4/4 褐色土（被熱地山）
12　10YR4/4 褐色土（地山）



第５図　江田川遺跡ＳＦ73出土状況図・土層断面図(1:40)

b. 土師器焼成坑

ＳＦ76(第６・７図)　調査区の中央部東寄りで検出した土師器焼成坑である。東西1.8m、南北3.0mで南に頂点を置く二等辺三角形で、検出面からの深さは0.3mである。中央やや北西寄りにはＳＢ78の柱穴が掘り込まれている。床面は、頂点から短辺側に向かって若干の傾斜があり、掘削した加工面の上に0.04～0.06m程度の置き土を行って整えた上で焼成を行っている。側壁は湾曲しながら立ち上がっており、上部は垂直になっていたと推定される。被熱は側壁・床面とも土坑の北西側が強く、他はあまり被熱の痕跡は顕著に見られなかった。また、壁の立ち上がり部も被熱は弱い。

焼成に用いたと考えられる薪材は、土坑の側壁北西隅付近と南東付近、中央南寄り付近で顕著に認められ、直径３cm程度の薪材が土坑の主軸と平行に置かれていたようである。樹種は、同定を行った３点全てがブナ科シイ属であった(25頁参照)。

出土遺物は土師器甕がある。小型の甕と長胴甕の２種が認められるが調製技法等は共通している。他の器種は出土していない。土器の表面は、裏表共に焼成時に端部が薄く剥離した箇所が認められるものが多く、層状に割れた破片も多量に見られる。出土位置は平面的には土坑の壁から0.2～0.4m離れた中央付近にまとまる傾向が見られ、大破片は床面の被熱も強い北西隅近くに多い。垂直レベルで出土分布を見ると、床面の傾斜と同じく、土坑の頂点すなわち南側から奥壁に向かって傾斜し、奥壁から0.8m付近が最も深くなる。この分布の底面は、最終焼成時の機能面とみなしてよいであろう。

時期は土師器甕の形態から７世紀前半と考えられ、江田川遺跡第１次調査で確認された竪穴住居と時期が一致する。集落内やその周辺で消費する土器を焼成していたのであろう。

c. 土坑

ＳＫ75(第３図)　ＳＦ73の南側で検出した不整形土坑である。平面規模は東西1.2m、南北1.0mで、深さは0.2mである。出土遺物は土師器がある。ＳＦ73より古いものと考えられる。

d. 掘立柱建物

ＳＢ78(第８図)　調査区中央部やや北寄りに位置する南北棟側柱建物である。桁行３間、梁行２間で、棟方向はＮ13°Ｅ、平面規模は桁行7.2m、梁行4.8mで、柱穴は直径0.4～0.5mである。出土遺物は北西隅柱穴の掘方から釘が１本、北辺中央柱穴の柱痕から灰釉陶器が出土した。時期は平安時代と考えられ、ＳＦ76を一部掘り込んでいる。

e. 溝

ＳＤ72(第３・４図)　調査区の西部で検出した南北溝である。幅1.2～1.6m、検出面からの深さ0.5mで、長さは15mを確認した。西側が急傾斜の側壁で深く、東側が緩傾斜となる断面形状となる。出土遺物は土師器・須恵器の他、図示し得ない小片であるが９世紀頃と見られる灰釉陶器があり、平安時代以降の溝と考えられる。また、ＳＦ73の東側を破壊しているため、これよりは新しいものである。

ＳＤ74(第３・４図)　調査区の西部で検出した南北溝である。幅0.7m、検出面からの深さ0.15mで、長さは2.5mを確認した。出土遺物は混入と思われる古墳時代の土師器がある。調査区西壁の断面観察ではＳＦ73よりは新しいことが分かり、ＳＤ72と平行することから同時に２条の溝が道路側溝のように存在していた可能性がある。同様の事例は、江田川遺跡第１次調査のＳＤ63・ＳＤ54があり、これも平安時代の溝である。

ＳＤ77(第３・４図)　調査区の南部で検出した東西溝である。幅1.1～2.2m、検出面からの深さ0.3mで、長さは8.5mを確認した。出土遺物は古墳時代の土師器・須恵器がある。明確な時期は分からないが、ＳＤ72とほぼ直交する向きであることから、同時期の可能性がある。

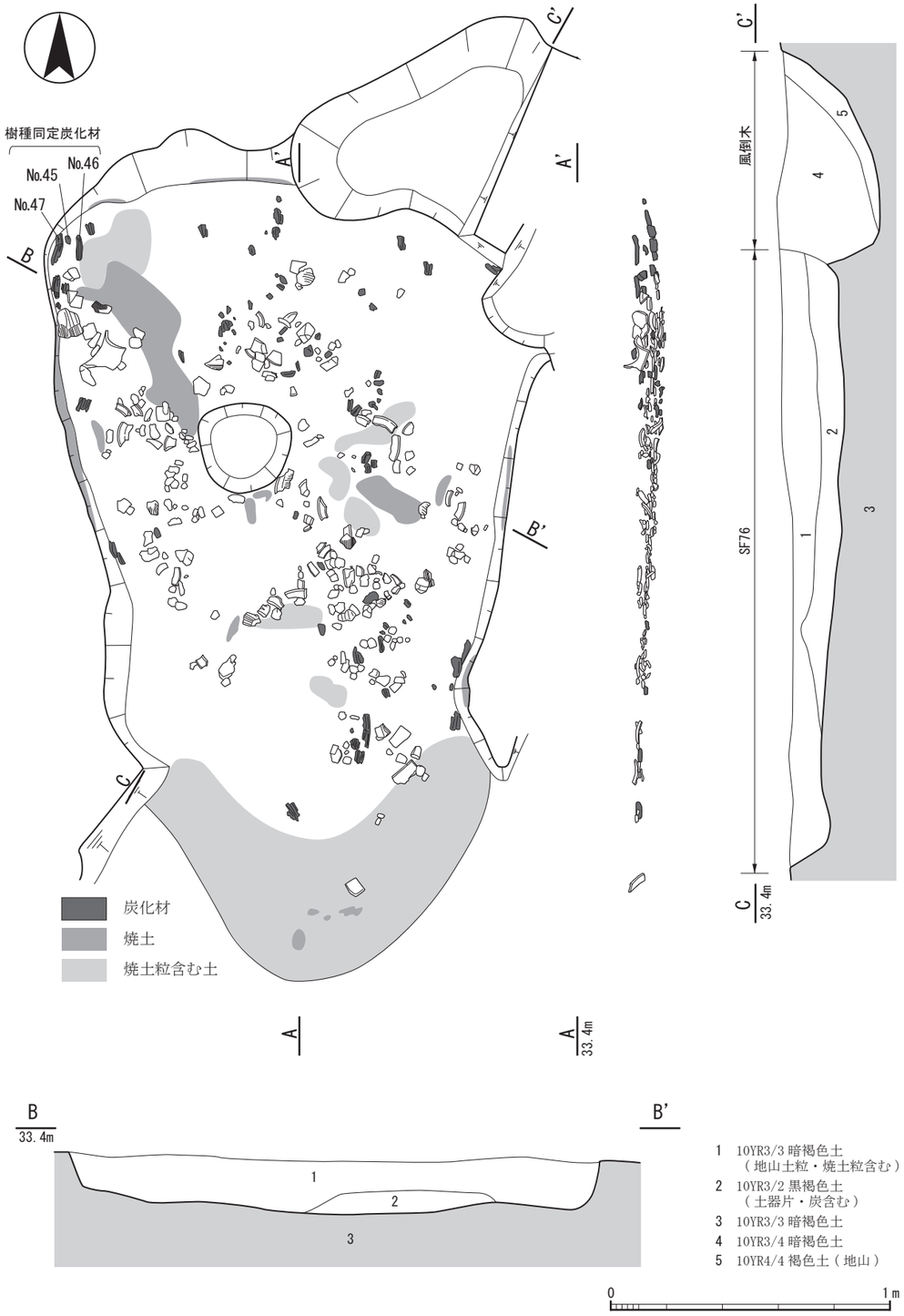
f. ピット

Ｄ２Ｐ１(第４図)　調査区の南部で検出した不整形のピットである。東西・南北とも0.6mで、検出面からの深さは0.2mである。出土遺物は３点の石材がある。いずれも加工痕があり、何らかの用途に使用されていた石材を、このピットに埋納したものと考えられる。

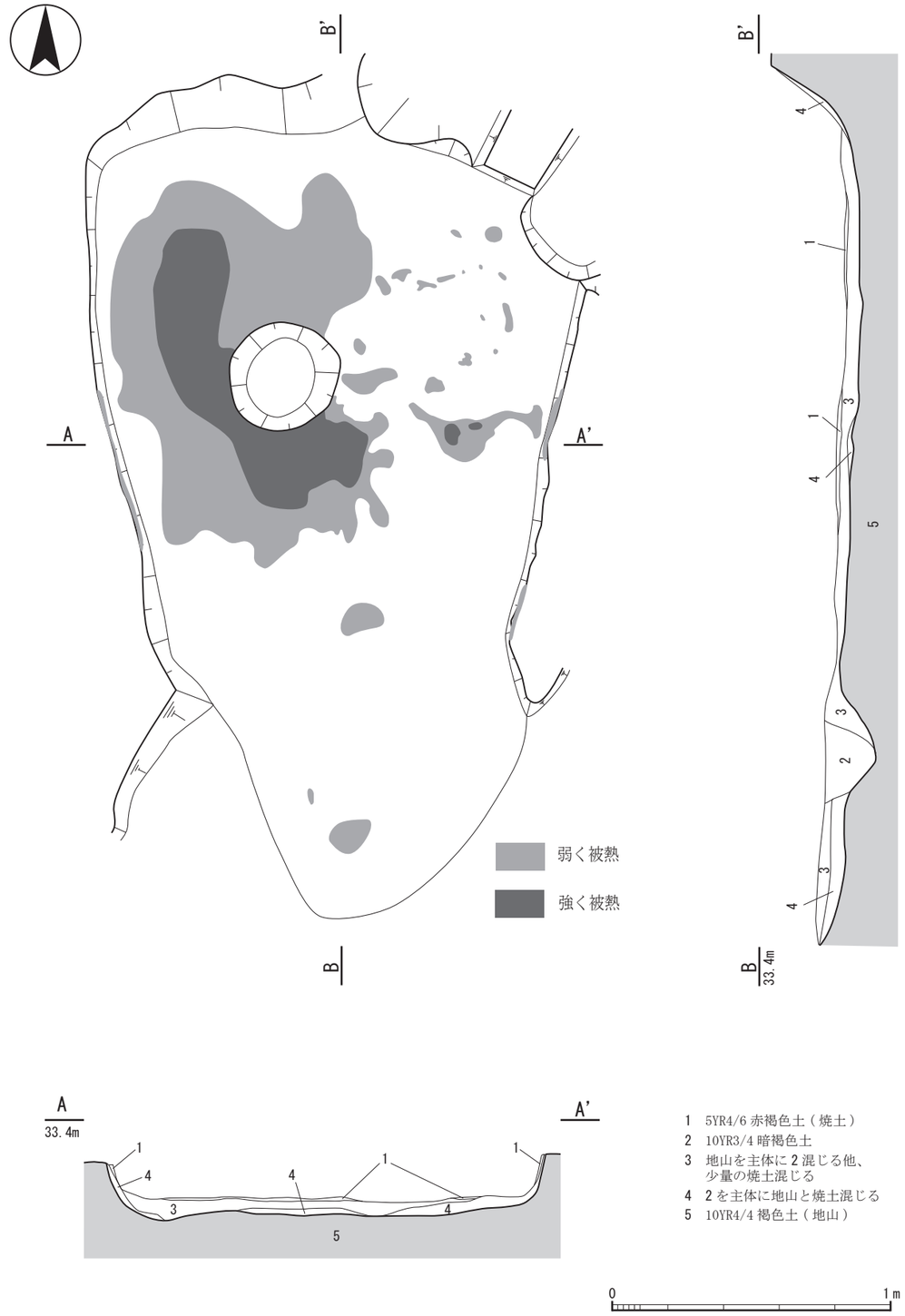
（３）遺物（第14図）

出土した遺物は土器・陶磁器・石製品・鉄製品・炭化物で、コンテナで15箱、55.5kgである。土師器が最も多く、中でも大部分がＳＦ76の出土遺物であるが、焼成に失敗して放置されたものであるため完形のものはなく、剥片状の破片が多量に含まれる。

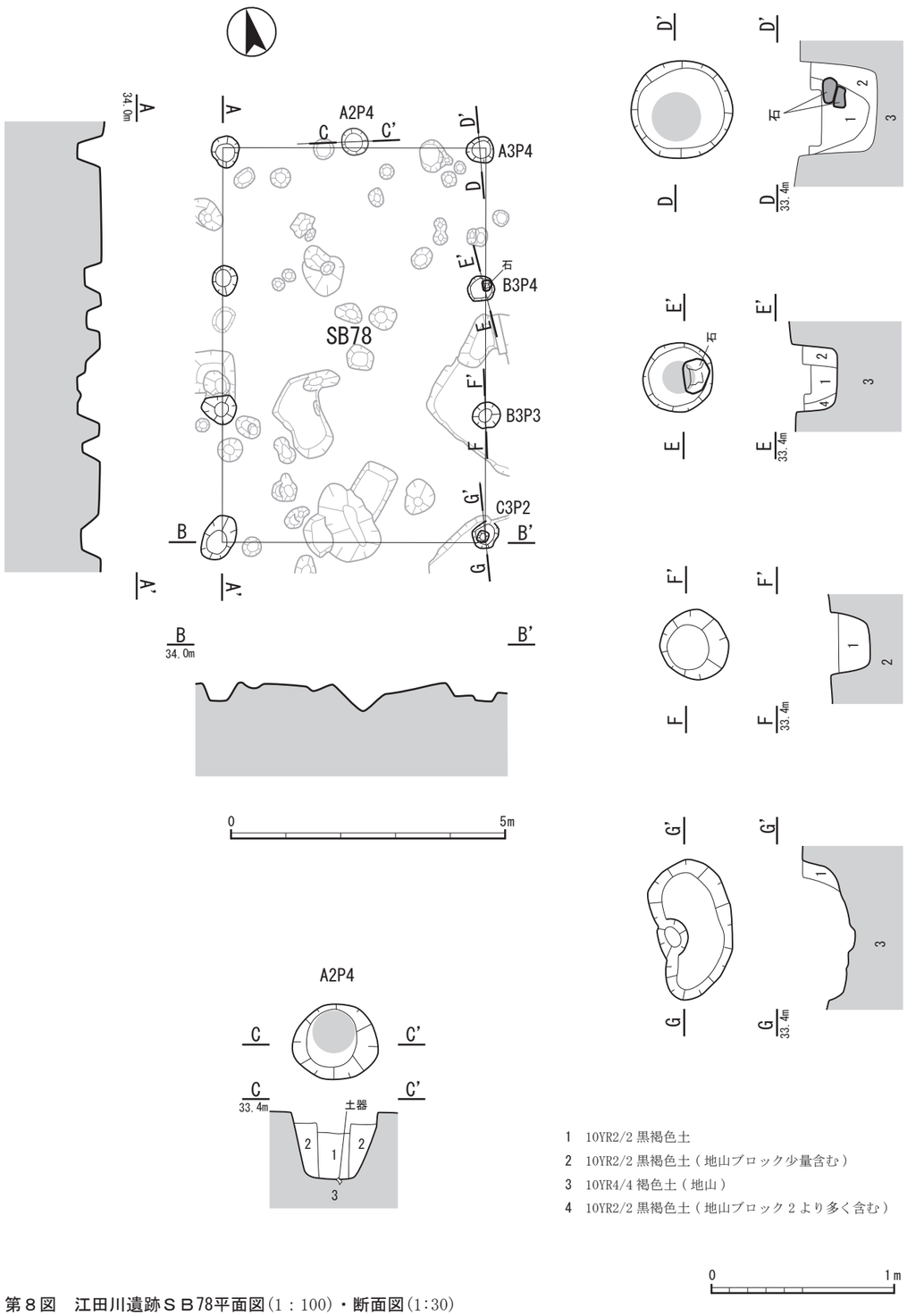
ＳＦ73(１～４)　1は土師器の鍋である。現存しないが、恐らく把手がつくものであろう。口縁端部をわずかに内湾させて仕上げる。２は土師器の杯である。砂



第６図　江田川遺跡ＳＦ76出土状況図(1:20)



第７図　江田川遺跡ＳＦ76平面図・断面図(1:20)



第８図　江田川遺跡ＳＢ78平面図(1：100)・断面図(1:30)

粒の多い胎土で、外面に粘土紐の継目がある。火葬時に強く被熱している。８世紀末から９世紀代のものであろうか。３は土師器杯で、口縁部をややつまみ上げ、ヨコナデで仕上げるが、外面のナデ幅は狭い。11世紀代のものと見られ、上層からの混入品であろう。４は混入品で、7世紀代の須恵器高杯脚部である。

ＳＦ76(５～８)　５は小型の土師器甕である。口縁端部を強く上につまみ上げている。６～８は長胴甕である。本遺構から出土した遺物のうち、焼成中の失敗品と思われるものはこれらの甕のみで、供膳具は見られない。

ＳＫ75(９)　土師器の甕である。表面の剥離が著しいが、形態から７世紀前半のものであろう。

ＳＢ78(10)　ＳＢ78の北西隅柱穴の掘方から出土した釘である。ほぼ完形と考えられる。

Pit(11～15)　11はＤ２Ｐ１から出土した加工痕のある石材である。素材は湖東流紋岩類で、円形の穴が掘り込まれている。軸摺穴にしては浅く摩耗も見られないことから、扉以外の機材の台石であろうか。図示していないが、同時に出土したほぼ同サイズの石材２点も平滑に整えられた面を持ち、同様に何らかの台石などとして使用されていたものであろう。12は７世紀前半の須恵器杯身である。13は灰釉陶器皿の底部で、折戸53号窯型式のものである。内底面は使用により摩耗しており、外底面には糸切痕がある。14は須恵器高杯脚部である。長脚で２方向２段のスカシがある。15はＢ２Ｐ４から出土した平安時代の土師器耳皿である。このピットはＳＢ78の中になることから、この建物と関連があるかもしれない。

３．川向山添遺跡(第３次)の遺構と遺物

(１)基本層位

基本層位は、暗褐色の表土下に褐色の包含層があり、地山はやや粘性のある褐色土である。地表面から検出面までの深度は概ね30cm前後である。今回の調査区は全周が調査済みであるため土層断面図を作成していないが、北勢バイパス関連の調査である第２次調査時に鉄塔敷地の南辺部分の断面実測を行った(註)。第９図下段に掲載したので参照されたい。

(２)遺構

検出した遺構は、掘立柱建物・溝・ピットである。第１次・第２次調査区で多数検出した竪穴住居はない。

a. 掘立柱建物

ＳＢ64(第９図)　調査区南部に位置する東西棟側柱建物である。桁行１間、梁行２間で、今回の調査では北辺の柱穴２個を新たに確認し、建物のプランを確定させることができた。遺物は、北東隅柱穴から７世紀の須恵器が出土した。遺物や柱穴埋土の状況などから古墳時代後期のものと考えられる。

b. 溝

ＳＤ71(第９図)　調査区南部で検出した溝である。長さ5.0m以上、幅0.2mで、検出面からの深さは0.2mである。南は第２次調査区に伸びるが、同調査では掘削時にこの溝以下のレベルまで下げていたため検出できていない。出土遺物はなく時期不明である。

(３)遺物

出土した遺物は土師器・須恵器等の土器類のほか中世陶器があり、コンテナで２箱、2.6kgであるが、ほとんどが小片で図示し得るものは下記の１点のみである。

ＳＢ64(19)　19は須恵器短頸壺の口縁部である。７世紀のもので、周辺でこれまでに検出されている竪穴住居や掘立柱建物と同時期である。

４．横谷遺跡(第２次)の遺構と遺物

(１)基本層位

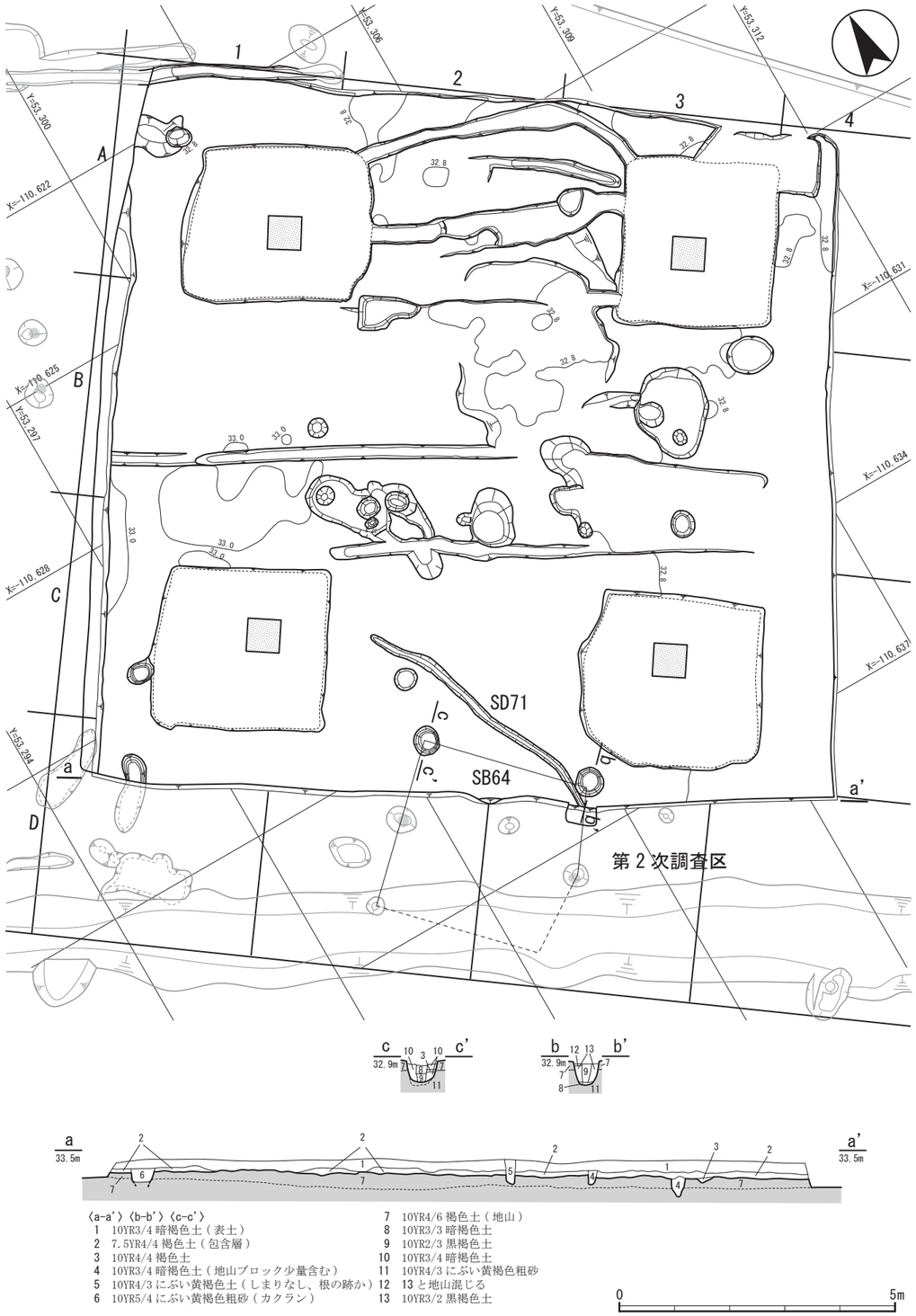
基本層位は、にぶい黄褐色の表土下に褐色の包含層または盛土があり、地山は粘性のある褐色土である。地表面から検出面までの深度は東部で概ね0.2m前後、西部で100cm前後である。

調査の結果、旧地形は南東から南西へ傾斜しており、そこに盛り土を行うことで耕作地を造成していたことが分かった。特に西側は盛り土が厚く、その下部には暗褐色の旧表土も確認できた。第１次調査時における地元での聞き取りで、本遺跡内では戦前に耕地整理を行い、トロッコを使って削った土砂を移動させたという話があり、恐らくその耕地整理に伴う盛り土ではないかと考えられる。

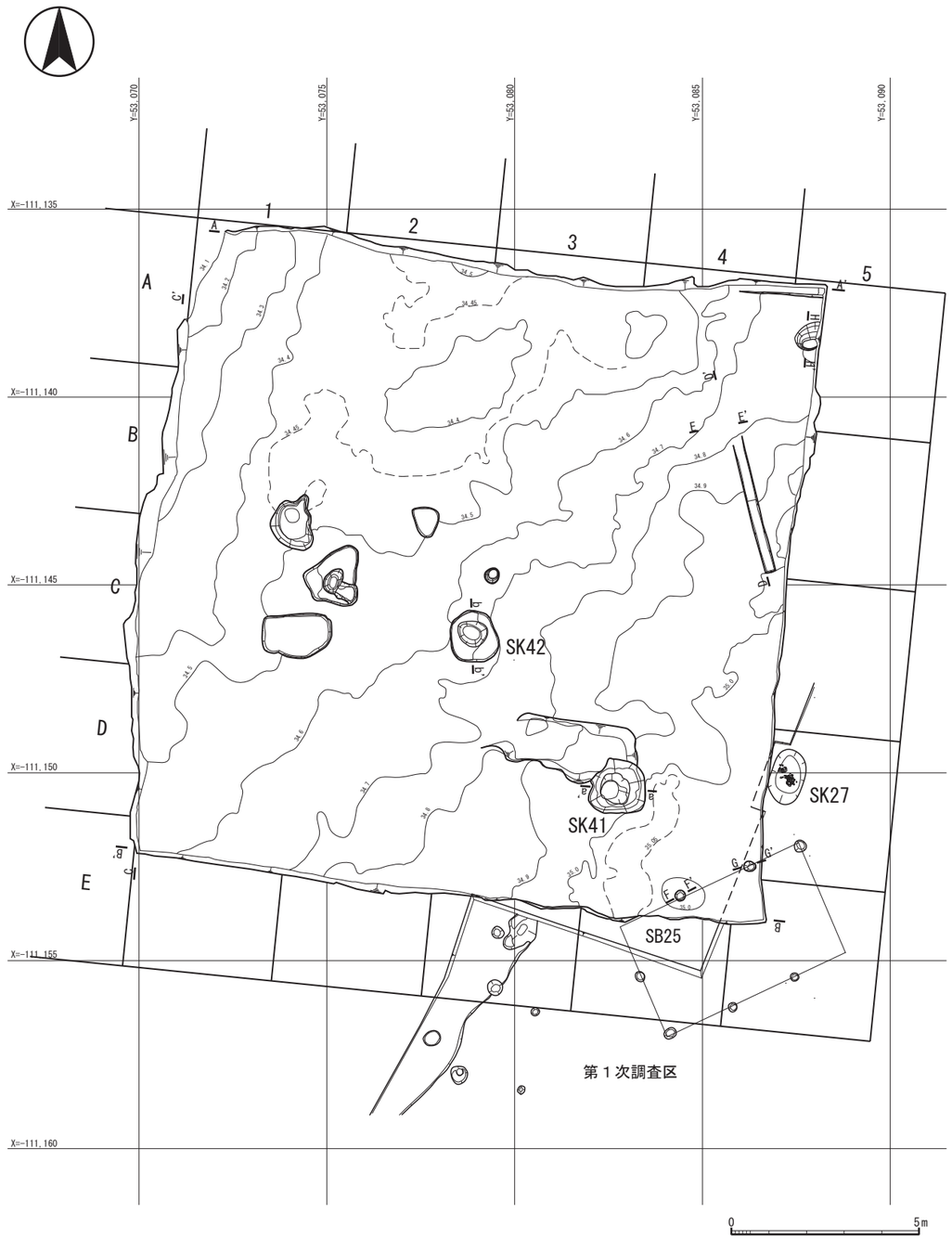
(２)遺構

a. 掘立柱建物

ＳＢ25(第10・13図)　調査区の南東部にある掘立柱建物で、第１次調査で確認していたものの一部を今回新たに検出した。桁行３間、梁行２間で、今回の調査では北辺の柱穴２個を、ほぼ想定通りの位置で確認し

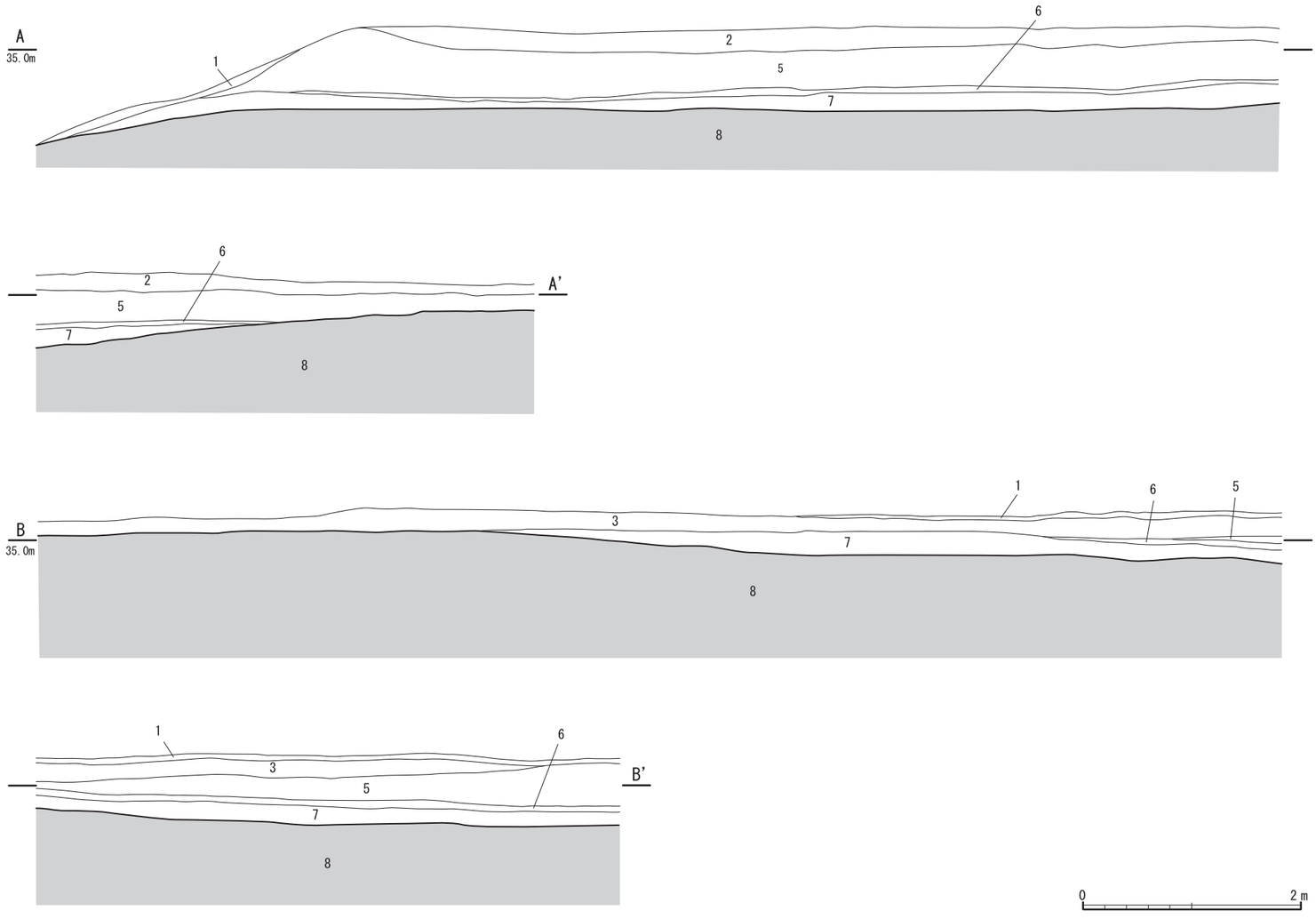


第９図　川向山添遺跡調査区平面図・断面図(1:100)

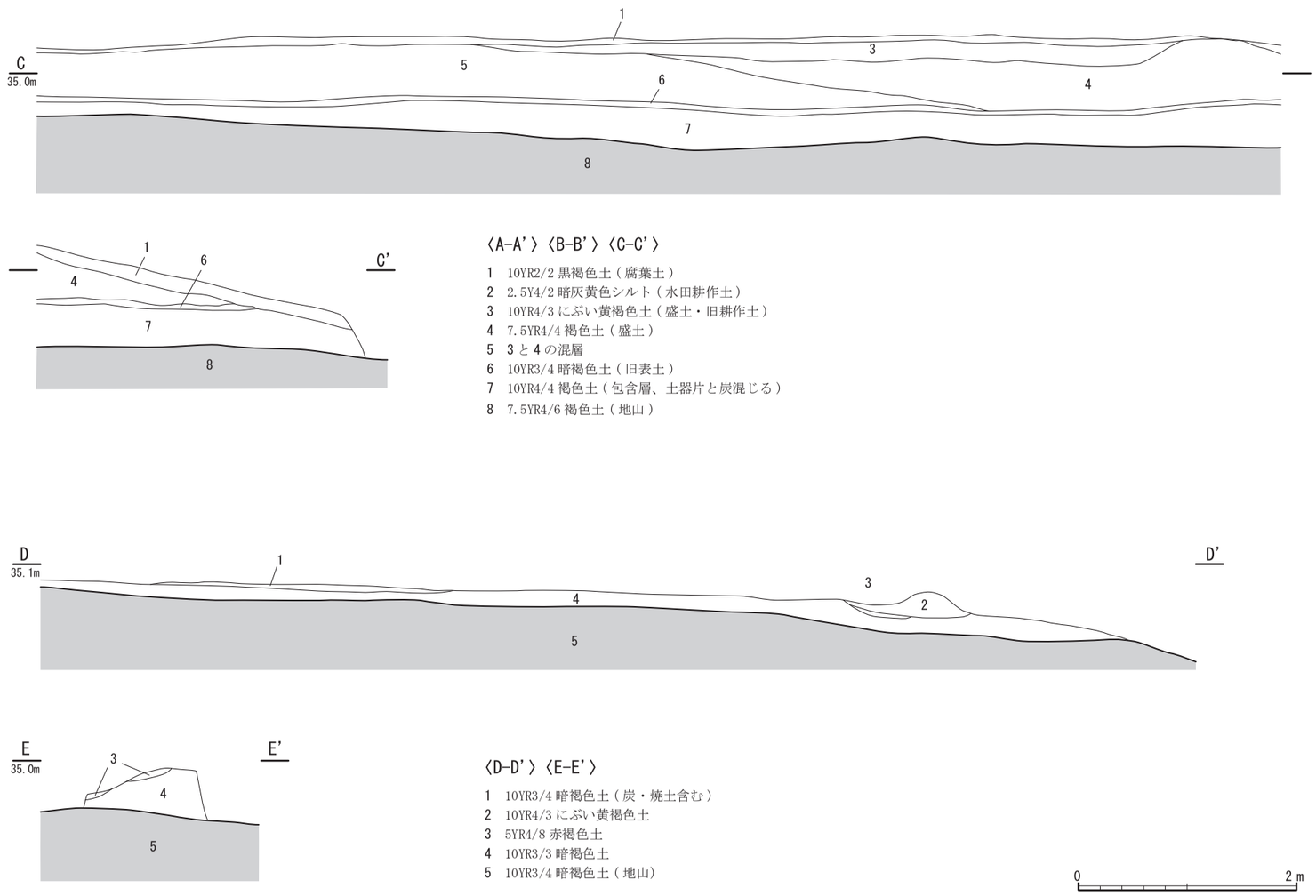


第10図　横谷遺跡調査区平面図(1:150)

第11図　横谷遺跡土層断面図①（1:50）



第12図　横谷遺跡土層断面図②（1:50）



〈A-A'〉〈B-B'〉〈C-C'〉

1　10YR2/2 黒褐色土（腐葉土）
2　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（水田耕作土）
3　10YR4/3 にぶい黄褐色土（盛土・旧耕作土）
4　7.5YR4/4 褐色土（盛土）
5　3 と 4 の混層
6　10YR3/4 暗褐色土（旧表土）
7　10YR4/4 褐色土（包含層、土器片と炭混じる）
8　7.5YR4/6 褐色土（地山）

〈D-D'〉〈E-E'〉

1　10YR3/4 暗褐色土（炭・焼土含む）
2　10YR4/3 にぶい黄褐色土
3　5YR4/8 赤褐色土
4　10YR3/3 暗褐色土
5　10YR3/4 暗褐色土（地山）

た。出土遺物はない。

ｂ.土坑

ＳＫ41(第10・13図)　調査区の南端部で検出した不整形土坑である。東西1.5m、南北1.5mで、検出面からの深さは0.3mである。出土遺物はない。

ＳＫ42(第10・13図)　調査区の南端部で検出した不整形土坑である。東西1.3m、南北1.3mで、検出面からの深さは0.3mである。出土遺物は土師器がある。

c.その他

調査区の北東部で、包含層が緩やかな谷状に落ち込んでいる状況が認められた。層中には焼土粒を多く含む部分が認められたため、サブトレンチを設定して土坑や竪穴住居が存在しないか慎重に判断しつつ掘削を行った。竪穴住居もしくは１次調査で検出したＳＫ35の延長部分の可能性も想定していたが、掘削の結果、ＳＫ35ほどの深さがなく、遺構と認め得るほど明瞭な肩部もなかった。また、等高線を見ると調査区北東部に浅い谷状の地形が入り込んできていることがわかる。ことから、自然地形の窪みに不要品を廃棄した場所であったと考えられる。この付近での遺物は、土師器のほかチャート剥片が１点ある。

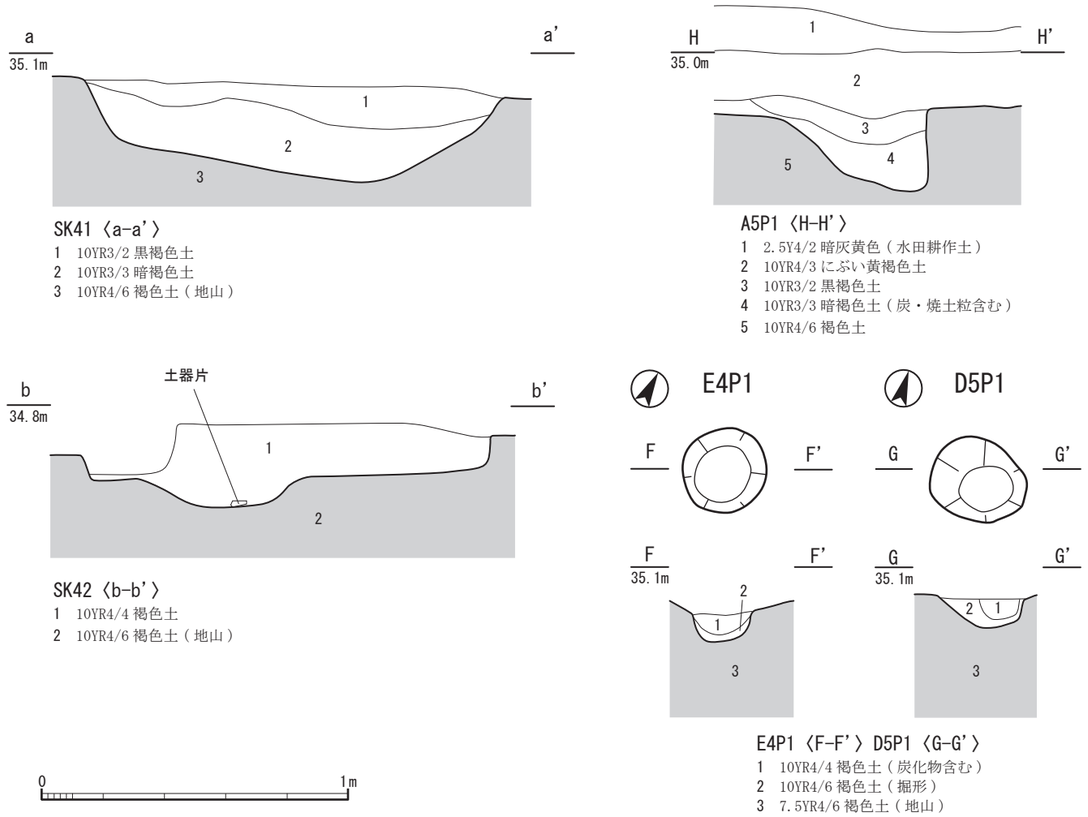
（３）遺物

出土した遺物は土師器Ｓ字状口縁台付甕の口縁部・脚部ならびに土師器高杯の脚部、チャート剥片などで、コンテナで１箱、2.0kgであるが、ほとんどが小片で図示し得るものは下記の２点のみである。

包含層(20・21)　20は土師器台付甕の脚部で、小型の個体と考えられる。21は土師器高杯の脚部である。このほか小片のため図示していないが、土師器Ｓ字状口縁台付甕の口縁部や、チャートの剥片が出土している。この遺物の傾向は第１次調査と同様である。

(山本)

註　四日市市教育委員会2022『川向山添遺跡・江田川遺跡２』14頁。



第13図　横谷遺跡ＳＫ41・ＳＫ42・Ｐｉｔ平面図・断面図(1:20)

出土遺跡	報告書番号	R番号	出土位置/出土遺構	種類	器種等	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
江田川遺跡	1	R2-4	C1　SF73	土師器	鍋	27.9	－	－	外ーヨコナデ、ハケメのちオサエ 内ーハケメ	密	良	橙(7.5YR7/6)	口25	
江田川遺跡	2	R2-2	D1　SF73 №1	土師器	杯	13.1	－	3.9	外ー磨滅 内ー磨滅	やや粗(3～5㎜の砂粒含む)	良(被熱)	淡橙(5YR8/4)	80	
江田川遺跡	3	R2-3	C1　SF73	土師器	椀	14.7	－	－	外ーヨコナデ、オサエ 内ーヨコナデ	密	良	明黄褐(10YR7/6)	小片	
江田川遺跡	4	R2-1	C1　SF73	須恵器	高杯脚部	－	－	－	外ーロクロナデ 内ーロクロナデ	密	良	灰(7.5Y4/1)	脚破片	
江田川遺跡	5	R3-1	B3　SF76	土師器	甕	13.7	胴部径16	17.3	外ーヨコナデ、ハケメ 内ーヨコナデ、ハケメ、ケズリ	密	良	にぶい黄(2.5Y6/4)	40	
江田川遺跡	6	R4-1	B3　SF76 №23	土師器	甕	17	胴部径22.9	－	外ーヨコナデ、ハケメ 内ーヨコナデ、ハケメ	密	良	浅黄(2.5Y7/4)	口50	
江田川遺跡	7	R3-2	B3　SF76	土師器	甕	20	－	－	外ーヨコナデ、ハケメ 内ーヨコナデ、ハケメ、剥離	密	良	黄褐(2.5Y5/4)	口25	
江田川遺跡	8	R4-2	B3　SF76　№31・32・24・40 北側部分・北壁部分・南東下層	土師器	甕	19	胴部径23.2	－	外ーヨコナデ、ハケメ 内ーヨコナデ、ハケメ	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	口30	
江田川遺跡	9	R2-5	D1　SK75	土師器	甕	15	－	－	外ー磨滅 内ーハケメ、磨滅	密	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	20	
江田川遺跡	10	R4-3	A2　P2 SB78 北西柱穴	鉄製品	釘	－	最大幅0.6	最大厚0.3	－	－	－	－	－	重量：11g 2片に分かれている
江田川遺跡	11	R5-1	D2　P1 №2	石製品	不明	最大長28.7	最大幅20	最大厚11.9	－	－	－	－	－	石質：湖東流紋岩 重量：12kg
江田川遺跡	12	R1-3	A3　P6	須恵器	杯身	11.4	最大径14.5	－	外ーロクロナデ 内ーロクロナデ	密	良	灰(5Y6/1)	受10	
江田川遺跡	13	R1-2	B2　P1	灰釉陶器	皿	－	高台径6.1	－	外ーロクロナデ、貼付高台、糸切痕 内ーロクロナデ	密	良	灰白(2.5Y8/1)	底100	
江田川遺跡	14	R1-5	C2　P3	須恵器	高杯脚部	－	－	－	外ーロクロナデ、沈線 内ーロクロナデ	密	良	灰白(5Y7/1)	脚破片	
江田川遺跡	15	R1-4	B2　P4	土師器	耳皿	7.5	幅4.9	2.1	外ーロクロナデ、指オサエ、板目圧痕 内ーロクロナデ	やや粗(1～2㎜の砂粒含む)	良	にぶい褐(7.5YR5/4)	100	
江田川遺跡	16	R1-6	C3　包含層(SH部分)	須恵器	杯身	10.7	最大径13	3.7	外ーロクロナデ、ヘラ切のちナデ 内ーロクロナデ、道具痕	密	良	灰白(5Y7/1)	口25	
江田川遺跡	17	R1-7	C3　包含層	須恵器	杯	13.9	－	－	外ーロクロナデ 内ーロクロナデ	密	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	－	
江田川遺跡	18	R1-8	A3　北ｻﾌﾞﾄﾚﾝﾁ	須恵器	杯	－	9.6	－	外ーロクロナデ、貼付高台 内ーロクロナデ	密	良	灰オリーブ(5Y5/2)	－	
川向山添遺跡	19	R1-1	D3　P1 SB64 掘方埋土中	須恵器	短頸壺	10.7	－	－	外ーロクロナデ 内ーロクロナデ	密	良	灰黄(2.5Y7/2)	口10	
横谷遺跡	20	R6-2	C1　包含層	土師器	台付甕	－	3.8	－	外ーオサエ 内ーオサエ	密	良	にぶい黄橙(10YR6/4)	－	
横谷遺跡	21	R6-1	(南壁)E3　包含層	土師器	高杯	－	－	－	外ー剥離 内ー剥離	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	－	

第２表　遺物観察表

Ⅳ　結語

（１）江田川遺跡

調査の結果、平成25年に行った第１次調査で確認した集落の遺構が、さらにその西側にも広がっていることを確認した。土師器焼成坑や火葬穴といった特徴的な遺構を検出し、出土遺物からは、集落の時期がこれまでの調査で判明している７世紀前半頃に加え、平安時代にもあったことが明確になった。

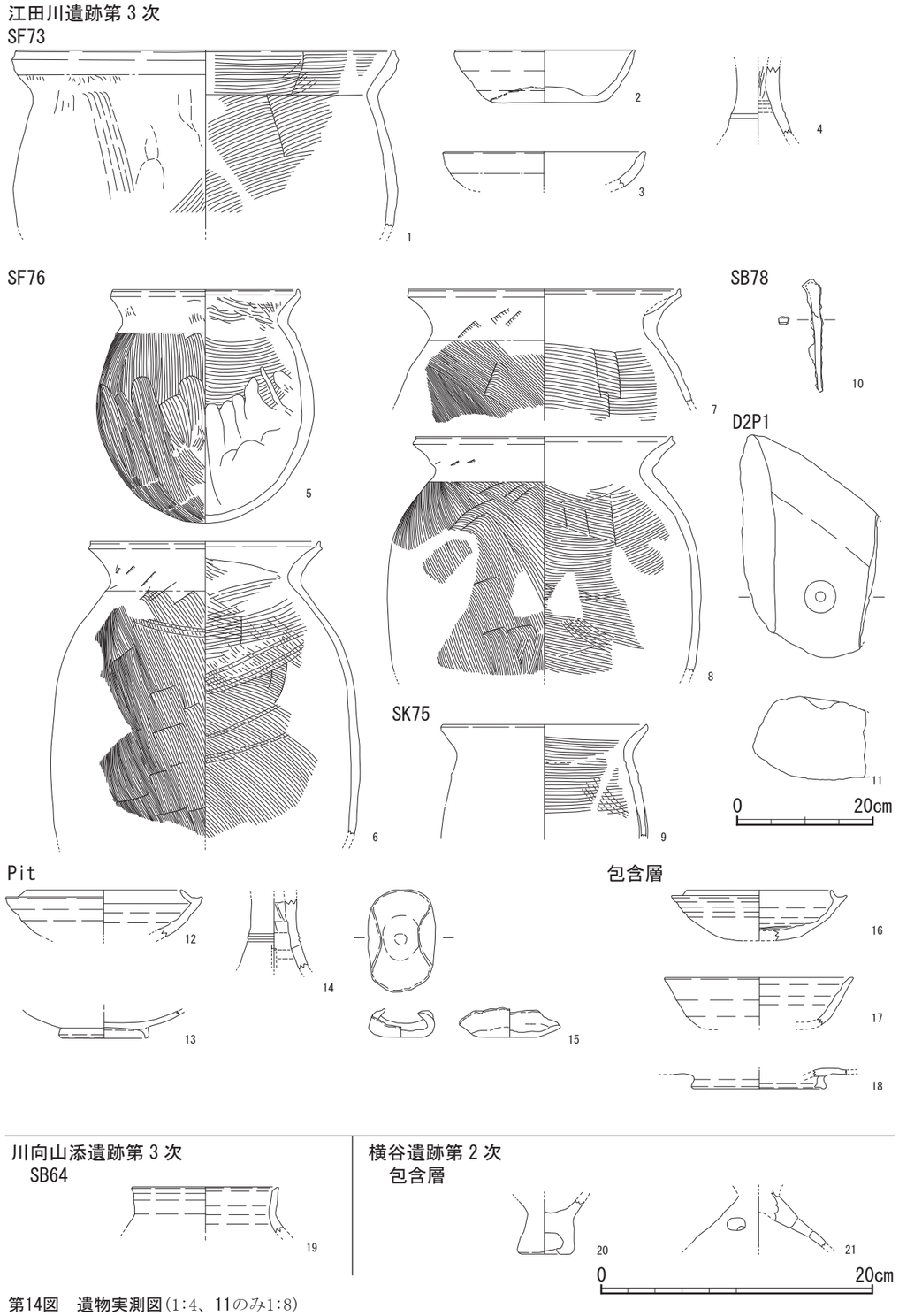
（２）川向山添遺跡

調査の結果、平成28年・30年度に行った第１次・第２次調査で確認した古墳時代後期の集落が、この場所にも広がっていたことが確認できた。しかし、周辺で多数確認している竪穴住居はなく、これまでの調査結果と合わせると今回調査区以南に住居が集密する状況が明らかとなった。

（３）横谷遺跡

調査の結果、平成29年に行った第１次調査で確認した古墳時代前期の集落の範囲が、丘陵の西側にも広がっていたことが確認できた。ただし、主に検出されたのは土坑で、竪穴住居などが見られなかったことや、全体に西へ傾斜している地形であることから、居住域ではなく廃棄土坑などが設けられた集落縁辺部に当たる場所と考えられる。

(山本)



第14図　遺物実測図(1:4、11のみ1:8)

四日市市江田川遺跡出土炭化材の樹種調査結果

(株)吉田生物研究所

1.試料

試料は四日市市江田川遺跡の土師器焼成坑SF76から出土した炭化材3点である。

2.観察方法

試料の炭化材から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3.結果

樹種同定結果(広葉樹１種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

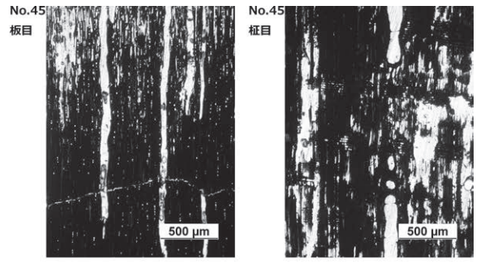
1)ブナ科シイ属(Castanopsis sp.)

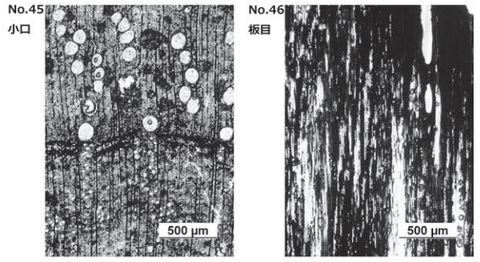
(遺物No.45,46,47)(写真No.45,46,47)

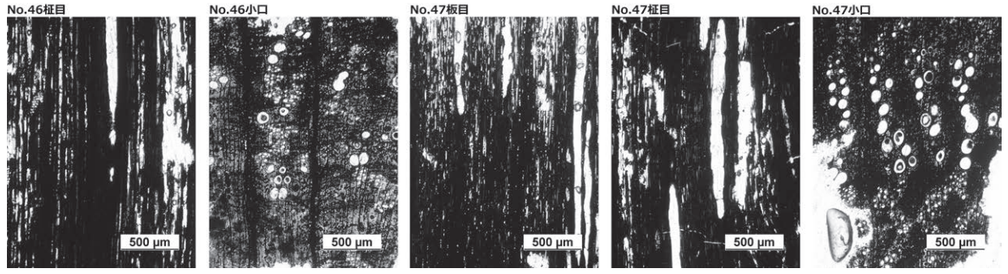
環孔性放射孔材である。木口では孔圏部の道管(～300μm)は単独でかつ大きいが接線方向には連続していない。孔圏外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で柵状の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。シイ属にはツブラジイとスダジイがあるが、ツブラジイに見られる集合～複合放射組織の出現頻度が低い為区別は難しい。シイ属は本州(福島、佐渡以南)、四国、九州、琉球に分布する。

四日市市江田川遺跡出土炭化材同定表

No.	遺構・層位	品名	樹種
45	SF76 No.45	炭化材	ブナ科シイ属
46	SF76 No.46	炭化材	ブナ科シイ属
47	SF76 No.47	炭化材	ブナ科シイ属







◆参考文献◆

林 昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所(1991)

島地 謙･伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版(1988)

北村四郎･村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ･Ⅱ」 保育社(1979)

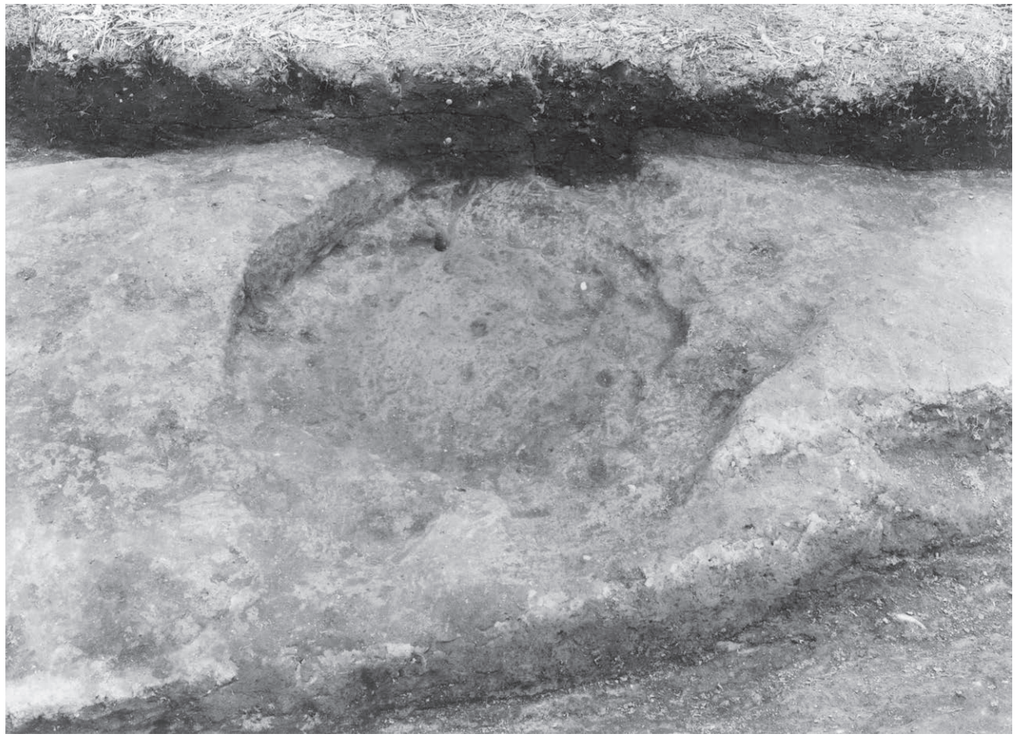
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1

図版１



江田川遺跡ＳＦ73完堀状況（東から）

江田川遺跡ＳＦ73遺物出土状況（東から）

図版２

江田川遺跡ＳＦ76（東から）

江田川遺跡ＳＦ76遺物出土状況（南から）

図版３

江田川遺跡ＳＢ78（南から）

江田川遺跡ＳＤ72（北から）

図版４

川向山添遺跡調査区全景（南西から）

川向山添遺跡ＳＤ71・ＳＢ64（北から）

図版５

横谷遺跡調査区全景（北東から）

横谷遺跡ＳＫ41（南から）

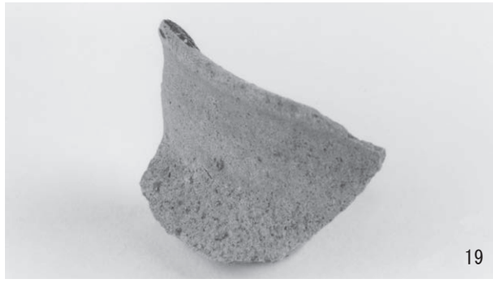
図版６

6

8

10

2



19

15

20

16

21

報告書抄録

ふりがな	そうでんてっとうけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく えだがわいせき３・かわむかいやまぞえいせき２・よこだにいせき２
書名	送電鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 江田川遺跡３・川向山添遺跡２・横谷遺跡２
シリーズ名	四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	58
編著者名	山本達也・川崎志乃
編集機関	四日市市教育委員会
所在地	〒510-8601　三重県四日市市諏訪町１番５号　℡059-354-8240
発行年月日	2022（令和４）年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
江田川遺跡（えだがわいせき）	四日市市（よっかいちし）西坂部町（にしさかべちょう）	24202	259	35° 00′ 00″	136° 35′ 00″	20190509～20190607	206（第３次調査）	送電鉄塔建設
川向山添遺跡（かわむかいやまぞえいせき）	四日市市（よっかいちし）西坂部町（にしさかべちょう）	24202	347	35° 00′ 07″	136° 35′ 05″	20200525～20200603	169.7（第３次調査）	
横谷遺跡（よこだにいせき）	四日市市（よっかいちし）西坂部町（にしさかべちょう）	24202	120	34° 59′ 47″	136° 34′ 45″	20190716～20190806	277（第2次調査）	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
江田川遺跡	集落跡	古墳～平安	掘立柱建物・土坑・溝・ピット	土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄釘	古墳時代の土師器焼成土坑１基、平安時代の火葬穴１基、掘立柱建物を１棟などを検出した。
川向山添遺跡	集落跡	古墳	掘立柱建物・溝・ピット	土師器・須恵器	これまでの調査結果と合わせ、集落の居住域の範囲がより明確になった。
横谷遺跡	集落跡	縄文・古墳	掘立柱建物・土坑・ピット	土師器・須恵器・陶器	第１次調査で確認した古墳時代前期の集落の縁辺部を調査した。

要約

江田川遺跡では、平成25年に行った第1次調査で確認した集落の遺構が、さらにその西側にも広がっていることを確認し、集落の時期がこれまでの調査で判明している7世紀前半頃に加え、平安時代にもあったことが明確になった。

川向山添遺跡では、平成28年・30年度に行った第1次・第2次調査で確認した古墳時代後期の集落が、この場所にも広がっていたことが確認できた。これまでの調査結果と合わせると今回調査区以南に住居が集密する状況が明らかとなった。

横谷遺跡では、調査の結果、平成29年に行った第1次調査で確認した古墳時代前期の集落の範囲が、丘陵の西側にも広がっていたことが確認できた。ただし、主に検出されたのは土坑で、竪穴住居などが見られなかったことや、全体に西へ傾斜している地形であることから、居住域ではなく廃棄土坑などが設けられた集落縁辺部に当たる場所と考えられる。

四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書58

江田川遺跡3・川向山添遺跡2・横谷遺跡2

2022（令和４）年３月31日
編集発行　四日市市教育委員会

ＰＤＦ作成：2022（令和４）年３月31日
作成者名　畠山印刷